新島襄のこころ　―イメージを通して―　(3)

寒梅の詩（うた）

竹中正夫

おそらく、新島襄の数多くのうたの中で、同志社人に最も広く愛されているのが寒梅の詩であろう。周知の通り、新島の寒梅の詩には二つある。左頁の上に掲げたものは、深井英五に与えたものであり、下の方のものは、大中寅二によって作曲がなされて同志社の学生、生徒、卒業生たちによってもうたわれている。（『同志社歌集』学校法人同志社、第三版、一九八五年、一二頁）

寒梅は新島の愛好した花であり、同志社の校庭のそこここには寒梅が植えてある。そして、今出川校地のチャペルの横には寒梅碑がある。同志社は寒梅につつまれた学園であり、「寒梅のふるさと」といってよい。それでは、新島襄はどうして寒梅を愛したのであろう。

昔から中国においても、日本においても、寒梅は凜々しい花として尊重されてきた。先般ニューヨークのメトロポリタン美術館で「中国美術における忠誠と抵抗」という特別展を見た。そこでは松と竹と梅が冬の苦節、忍従の中に節操をまげずに一念を貫く人の象徴として描かれていた。日本では、松竹梅というと正月のめでたのシンボルとなっているが、本来は苦難の中に静かに、しかし、楚々と生きる姿をあらわしたものである。

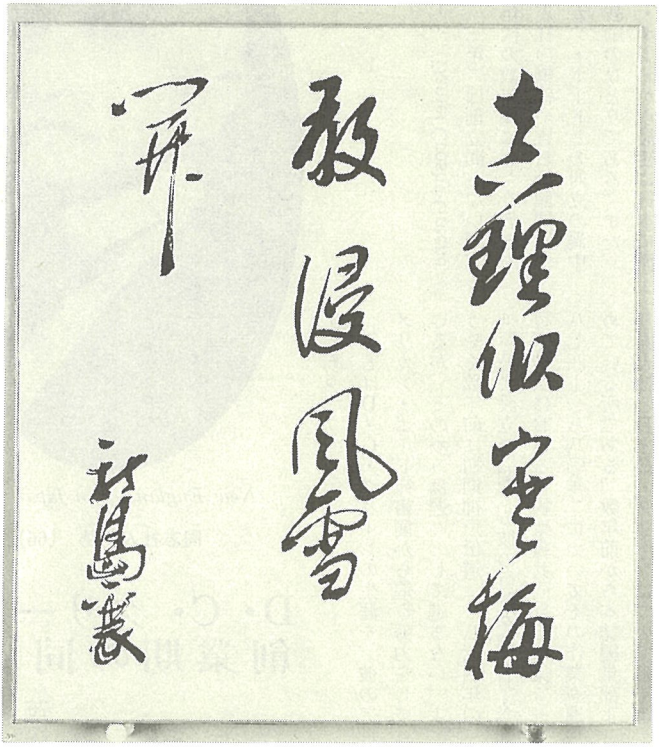
この二つの寒梅の詩は、いづれも新島の晩年の作品で、おそらく明治二〇年冬大磯で静養していたときのものと推察される。

この二つの詩の一つは深井英五に色紙にしたためて与えたものである。彼は、新島襄と同郷の群馬県の出身で、明治一九年に同志社普通学校へ入学し、同二四年に卒業した。深井は、貧しい家に生れ、同志社では奨学金をもらって勉励し、早くから親を扶養しなければならないような境遇のなかで苦労しながら生き抜いた人である。新島は深井にこういった。

学校を卒業して、如何にして就職しやうかと云ふ事を考へるのは、抑々末である。人間は、自分で修養して置きさへすれば、為す可き仕事は何処に行ってもある。自分を修養して、世間の為めに何（どう）うしたらよいかと云ふ事を考へさへして居たらよい。就職等と云ふ事に齷齪する様な考へで勉強してはいけ無い（『創設期の同志社』）

周知のように深井英五は、のちに日銀総裁として、日本の財政の国際的課題を負う第一人者として貢献した。彼の語るようにかれは、新島のことばにたえず励まされていたものと思われる。

（大学神学部教授）



寒梅の詩

庭上一寒梅笑
侵風雪開
不争又不力
自占百花魁